『角膜上皮障害』に関するメディアセミナーを開催

ライオン

ライオンは11月8日、ドライアイやアレルギーなどの様々な原因から角膜が傷つくことにより発症する角膜の病気「角膜上皮障害」に関するメディアセミナーを、トラストシティカンファレンス丸の内にて開催した。セミナーでは、角膜上皮障害の診療実態に関する最新調査結果の発表とともに、東邦大学医療センター大森病院眼科教授の堀裕一氏が「急増する『角膜上皮障害』の課題」について、順天堂大学医学部付属静岡病院眼科先任准教授の土至田（としだ）宏氏が「角膜ケアの対処法」について、それぞれ講演した。

開会の挨拶で、同社の点眼剤を担当する三浦葉一ヘルス&ホームケア事業本部薬品事業部ブランドマネージャーは、セミナーの開催概要について「この10年でPCやスマートフォンなどのVDT（Visual Display Terminals）作業時間がどの世代においても増加しており、VDT作業が誘引となってIT眼症と呼ばれる目の疲れや乾きといった症状が発症するなど、目を取り巻く環境や目に対するダメージは深刻化している。スマホ時代とも呼ばれているが、乾きだけでなく目そのものが傷ついてしまうところまで来ており、角膜危機といえる状況にある。そこで、今回のセミナーを通じて、あまり知られていない角膜上皮障害の実態と最新の角膜ケアの方法について理解を深めてほしい」と語った。

三浦氏

ライオンは今回、堀氏による監修のもと眼科専門医101名を対象に今年9月25～30日にかけて、角膜上皮障害の診療実態について調査を行った。その結果、6割以上（63・4％）の眼科医が角膜上皮障害を伴うドライアイ患者（角膜上皮に傷などがみられるドライアイ患者）が、スマートフォンが普及し始めた10年前に比べて増えていると回答した。

さらに、角膜上皮障害を伴うドライアイ患者が増えていると指摘した眼科医のうち、患者数の推移や年代について尋ねた結果、10年前との比較で患者数が3割以上と回答した眼科医が4割（40・7％）を超え、全世代の中でも20代女性の患者数の増加が顕著だったことが明らかとなった。

堀氏によると、女性は一般的に加齢に伴う女性ホルモンの減少などが原因で男性と比べてドライアイになりやすく、20代女性の患者数が増加傾向にある点についてはカラーコンタクトの使用に加え、上下のまぶたの内側にある目に油分を供給するマイボーム腺を埋めるようなアイメークや、まつ毛の生え際に負担がかかりやすいまつ毛エクステンションの普及などが原因となっているという。

「VDT作業に集中してまばたきをしないと乾燥が進み、極度の乾燥状態ではこするだけでも角膜を傷つけてしまう。人間には本来、傷を上回る修復力が備わっているが、現代の生活環境では3コン（コンタクト・パソコン・エアコン）以外にもPM2・5や花粉、黄砂など角膜を傷つけるリスク要因が様々で、リスク要因の方が修復力を上回っている状況だ。それにより、角膜のターンオーバー力が低下し、角膜上皮障害を伴うドライアイ患者の増加につながっている」（堀氏）

ビタミンA配合目薬の今後の広がりに期待

続いて、土至田氏が登壇し、ライオンと長年にわたって共同研究を行っているビタミンAの点眼による角膜修復効果を交えながら角膜ケアの対処法について講演した。

土至田氏によると、角膜のターンオーバー力を高める方法としては、「角膜が乾かないようにして角膜上皮細胞の欠損を防ぐ」「角膜上皮細胞の増殖力を高める」の大きく2つに分類されるという。

角膜上皮細胞の欠損を防ぐ効果的なセルフケアの方法としては、「涙が乾かないようにする（視線を下向きにして涙液蒸発を防ぐ）」「点眼をする（目的に合った点眼剤を選ぶ）」「マイボーム腺のつまりをなくす（目を温めることで脂を溶かす）」の3つが重要なポイントとなる。

角膜上皮細胞の増殖力を高める方法としては近年、「ビタミンA」（レチノール）の持つ有効性に注目が集まっている。ビタミンAは、角膜上皮細胞のヒアルロン酸産生を促し、ヒアルロン酸が角膜上皮細胞の成長を促して角膜の修復を促進するという。さらに、ビタミンAには結膜上皮の杯（さかずき）細胞を再生させ、涙液の安定性を保つムチンの産生を促進させる働きを持つ。

ビタミンAのヒトでの効果では、ドライアイ患者66名（各群33名）を対象に、被験薬（ビタミンA配合点眼剤）と、プラセボ（ビタミンAなし点眼剤）を4週間点眼し、角膜の傷の回復を評価した。その結果、プラセボと比較して被験薬を使用した患者の方が、角膜上皮障害とムチン層障害でいずれも有意な回復が認められ、角膜上皮障害スコアが9点だった患者が2点に改善した例もみられた。

「ビタミンA（レチノール）は、スキンケア化粧品にも含まれるように肌や目の保湿にも役立つため、肌のお手入れとともに目もケアしていくことが望ましい。ビタミンAは分解されやすい成分だが、ライオンがビタミンAの安定化方法で特許を取得している。涙を構成する3つの層（油層・水層・ムチン層）のうち、水層とムチン層の両方にアプローチできるビタミンA配合目薬はとても珍しく、今後の広がりに期待している」（土至田氏）

50周年記念祝賀会を開催

日本緑茶センター

日本緑茶センターは1969年、日本に初めてハーブティーを導入した。以降、心と身体の健康に寄与するため、パイオニアとしてクレイジーソルト、アルガンオイルと新しい市場を形成してきた。アルガンオイルは食用のほか、化粧品のアルガンビューティーシリーズを開発し、原料供給も行う。

このほど、東京都内のホテルで50周年記念の祝賀会を開催し、創業者の北島勇会長は冒頭あいさつで50年の歴史を振り返り、世界のお茶・ハーブを普及させたことが米国、モロッコ王国の駐日大使の目にとまり、事業領域の拡大につながったことを明らかにした。

「お茶、薬草、塩、油と人の生死にかかわるものを扱っている。儲けようと思って、商売を広げてきたわけではない。クレイジーソルト、アルガンオイルは相手先の駐日大使から頼まれてやったことで、これはミッションだと思っている。ひたすらミッションを果たし続け、50年の節目を迎えた」

5年前に就任した北島大太朗社長は、心と身体の健康に寄与するというビジネスを継承しながら、新しい成長のための基盤づくりに取り組んでいる。昨年9月、新しい研究開発の拠点として静岡工場を竣工し、独自の製造技術が可能になった。

「パイオニアは全く新しいことへの挑戦を意味するが、従来の素材を新たなものに変えていくことも、パイオニアの大きなミッションととらえている。未来に向けた新たな技術というエッセンスを加えていく」

同時に、これからの5～10年を見据え、ハーブ、お茶、化粧品にも使える新しい素材も開拓していく。

第19回標語の最優秀賞を発表

日本歯磨工業会

日本歯磨工業会はこのほど、「歯と口の健康週間」の関連企画として募集してきた標語作品の中から最優秀賞ほか各賞を発表した。

最優秀賞は齊藤向日葵さん（福島県在住）の作品「丈夫な歯 歯磨き上手で 金メダル」に決定し、10月28日に福島県会津若松市内で表彰式を行った。齊藤さんの作品は同工業会の標語として幅広く活用していくという。工業会HPでは、優秀賞などその他の受賞作品も確認できる。

同工業会は2001年より歯磨きの大切さをテーマにした標語の募集を開始し、今年度で第19回を迎えた。工業会HPを通して今年4月から6月の3カ月間募集し、1万4845作品の応募があった。

表彰式には、同工業会の岩崎哲也専務理事と鈴木久美子広報委員長が出席し、表彰状と賞金を齊藤さんに授与した。

齊藤さんは、「ずっと保育士として働き、子どもたちに『歯みがきほとても大事。歯みがきすることで丈夫な歯になる。丈夫でピカピカの歯は誇りに思っていること、それは金メダルだよ』と言っていました。その思いから浮かんだ言葉を並べてできた作品です」と標語に込めた思いを述べ、受賞の喜びを語った。